雲仙市文化財調査報告書　第16集

十園遺跡Ⅲ・伊古遺跡Ⅳ

juuzono　i ko

－市内圃場整備事業に伴う発掘調査報告－

2017
長崎県雲仙市教育委員会

十園遺跡上空より有明海を望む

巻頭図版②

伊古遺跡上空より有明海を望む

発行にあたって

雲仙市は、雲仙普賢岳の麓、豊かな大地と、光輝く海に囲まれた、自然と文化のあふれるふるさとです。この報告書は平成12年度から平成16年度に実施しました、国見町多比良地区町営圃場整備事業に伴う十園遺跡の発掘調査及び、平成17年度から平成20年度に実施しました、古江地区圃場整備事業に伴う伊古遺跡の発掘調査の記録です。

十園遺跡は、島原半島北端、雲仙普賢岳から伸びる緩やかに傾斜する火山性山麓扇状地に展開し、遺跡が位置する低丘陵の両側には土黒川と多比良川が流れています。遺跡からは、旧石器時代から中世までの遺構及び遺物が発見されております。中でも、古代の大型掘立柱建物群は『肥前国風土記』に登場する高来郡衙に関連する遺構として注目されています。

伊古遺跡は、島原半島の北端、雲仙普賢岳から伸びる緩やかに傾斜した火山性山麓扇状地に展開し、中世の城跡である杉峰城跡が隣接しています。遺跡からは、縄文時代草創期末から中世までの遺構及び遺物が数多く発見されており、中でも縄文時代草創期末の石器群及び中世の中国製貿易陶磁器の出土量は目を見張るものがあります。

十園遺跡及び伊古遺跡はこれまでにも調査内容を報告していますが、今回、弥生時代中期から弥生時代後期にかけての遺物の再整理を行い報告することになりました。その結果、北部九州及び肥後地域から搬入された遺物が多く出土していることが分かりました。当時の人々が北部九州や肥後地域の人々と交流を行い、日々の生活を営んでいた様子が想像できます。

この調査報告書が文化財の保護保存のために多くの方に活用され、埋蔵文化財の保護に対する関心と理解をいただく資料になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、ご指導、ご協力いただきました、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県教育委員会学芸文化課の皆様に衷心から感謝申し上げ、発行のことばといたします。

平成29年3月24日

雲仙市教育委員会

教育長　山　野　義　一

例　　言

1．本報告は平成12年度～平成16年度に実施した国見町多比良地区町営圃場整備事業に伴う長崎県雲仙市国見町に所在する十園遺跡及び平成17年度～平成20年度に実施した古江地区圃場整備事業に伴う長崎県雲仙市瑞穂町に所在する伊古遺跡の発掘調査の報告である。

2．調査は旧国見町教育委員会及び旧瑞穂町教育委員会、雲仙市教育委員会が担当した。
発掘調査は下記の期間実施した。
十園遺跡
2000年8月25日～2004年6月17日
伊古遺跡
2005年8月17日～2008年10月10日

3．調査体制は次のとおりである。
調査主体　雲仙市教育委員会
教育長　山野　義一（平成25年3月～）
教育次長　山本　松一（平成26年4月～）
生涯学習課長　松橋　秀明（～平成28年3月）
生涯学習課長　本田　和久（平成28年4月～）
文化財班班長　柴崎　孝光（平成25年4月～）
文化財班主事　横尾　幸治（～平成28年3月）
文化財班主事　林田　英明（平成28年4月～）
調査担当
文化財班参事補　辻田　直人
文化財班主査　村子　晴奈（平成28年4月～）
文化財調査員
松崎　光伸（平成27年4月～）
今西　亮太（平成28年4月～）
文化財整理員
早稲田　一美・柳原亜矢子・本田　円香（～平成28年3月）・三浦　幸菜（平成28年4月～）・吉田　光孝（平成28年10月～）

十園遺跡調査担当（2000年～2004年）
社会教育係　辻田直人
文化財調査員　竹中哲朗
文化財整理員　早稲田一美・濱本秀美・
柳原亜矢子
伊古遺跡調査担当（2005年～2008年）
主査　江崎亮太・辻田直人
文化財調査員　安樂哲史・山下美郷・益田豊明・
小野綾夏・大野瑞恵
文化財整理員　早稲田一美・柳原亜矢子・林田崇

4．十園遺跡の現地での遺構・遺物の実測は酒井由紀子・植木貴道・東文子・林繁美・寺中典子・村子香織・峯祐介・益田・竹中・辻田が行った。現地調査を竹中・辻田が行った。伊古遺跡の現地での遺構・遺物の実測は進藤涼子・前田チイ・古川新・水谷安孝・東文子・江崎・安樂・山下・益田が行なった。現地調査を江崎・安樂・山下・益田・辻田・小野・大野が行った。

両遺跡の遺物の実測及び接合は本田・柳原・青木・林田・早稲田・村子が行ない、一部は(株)埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。トレースは早稲田が行った。また、図版の編集・作成は柳原・村子が行い、遺物写真は村子が行った。

5．十園遺跡の現地での遺構・遺物実測の一部は㈱埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。伊古遺跡の現地での遺構実測の一部は㈱埋蔵文化財サポートシステム長崎支店及び㈱扇精光に委託した。遺物実測の一部は㈱埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。

6．十園遺跡の空中写真撮影業務は(株)九州文化財研究所に委託した。伊古遺跡の空中写真撮影業務は㈱九州文化財研究所及び㈱スカイサーベイ九州に委託した。

7．両遺跡出土の遺物及び写真・図面等は雲仙市歴史資料館国見展示館で保管している。

8．本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は世界測地系による。

9．現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。
長岡信治（長崎大学）、木本雅康（長崎外国語大学）早田勉（㈱火山灰考古学研究所）、山口勝也（㈱埋蔵文化財サポートシステム）、竹中哲朗（諫早市教育委員会）、長崎県教育委員会、長崎県島原振興局農村整備課（順不同）

10．本書の執筆・編集は辻田・村子による。

目　　次

巻頭図版
発行にあたって
例　　言
本文目次
挿図目次
表　目　次
図版目次

第1章　十園遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1p
　第1節　調査の経緯
　　-発掘調査にいたる経緯-
　　-発掘調査の方法及び経過-
　　-遺跡の地理的・地形的・歴史的環境-
　第2節　弥生時代
　　-4区 SB01-
　　-3区 SD01・5区 SD01-
　　-26区 SD02・12区 SD03-

第2章　伊古遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14p
　第1節　調査の経緯
　　-発掘調査にいたる経緯-
　　-発掘調査の方法及び経緯-
　　-遺跡の地理的・地形的・歴史的環境-
　第2節　弥生時代
　　-D6区調査区外東側出土土器-

第3章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24p
　第1節　総括
　　-十園遺跡-
　　-伊古遺跡-
　第2節　脚台付甕について

挿　図　目　次

第１図　十園遺跡位置図（1/24,000）
第２図　調査区配置図（1/2,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第３図　弥生時代の主な遺構配置図（1/1,500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第４図　4区SB01検出状況（1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第５図　4区SB01出土土器（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第６図　3区SD01・5区SD01検出状況（1/140）　5区SD01遺物出土状況（1/50）・・・・・・・・・6
第７図　3区SD01・5区SD01出土土器（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第８図　26区SD01・SD02検出状況（1/100）　遺物出土状況（1/50）・・・・・・・・・・・・・・9
第９図　26区SD02　出土土器（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第10図　26区SD02　出土土器（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第11図　26区SD02・12区SD03　出土土器（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第12図　伊古遺跡位置図（1/20,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第13図　調査区配置図（1/1,775）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第14図　D6区調査区外東側　出土土器（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第15図　D6区調査区外東側　出土土器（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第16図　D6区調査区外東側　出土土器（1/6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第17図　D6区調査区外東側　出土石器（2/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

表　目　次

第１表　十園遺跡出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第２表　伊古遺跡出土遺物観察表（土器）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第３表　伊古遺跡出土石包丁計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

図 版 目 次

巻頭図版①(カラー)　十園遺跡上空より有明海を望む
巻頭図版②(カラー)　伊古遺跡上空より有明海を望む

図版1
十園遺跡上空写真(昭和36年　国土地理院)

図版2
4区　SB01・02　上空写真(検出状況)
4区　SB01・02　上空写真
4区　SB01　上空写真
3区・5区　SD01　上空写真
3区・5区　SD01　上空写真(完掘状況)
26区　SD01・02　上空写真(完掘状況)

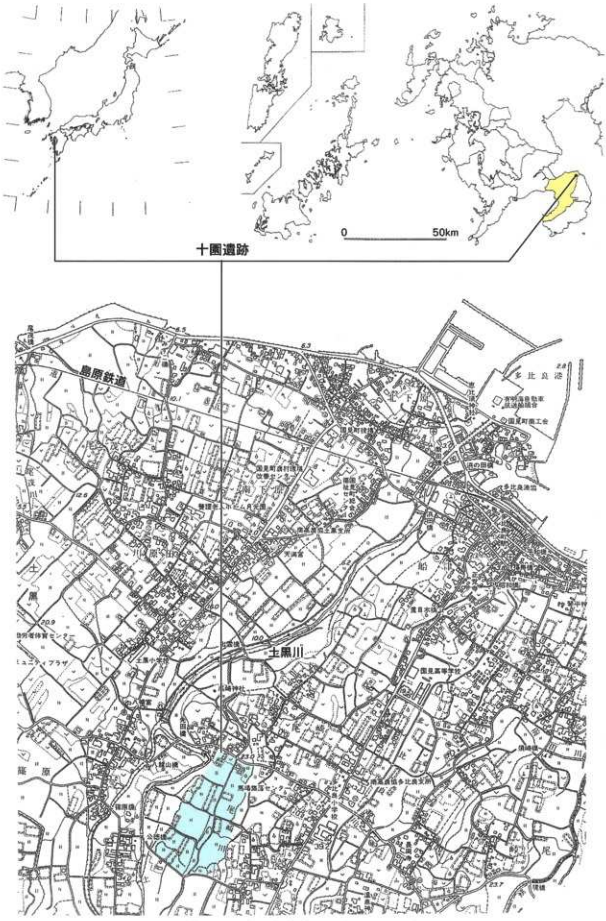
図版3
十園遺跡出土土器

図版4
十園遺跡出土土器

図版5
伊古遺跡上空写真(昭和35年　国土地理院)

図版6
伊古遺跡出土土器

図版7
伊古遺跡出土土器・石器



第１図　十園遺跡位置図(1/24,000)

第１章　十園遺跡

第１節　調査の経緯

-発掘調査にいたる経緯-

平成 10 年度に国見町教育委員会(現雲仙市教育委員会)が主体となり、遺跡の範囲確認調査を行った。その結果、従来の十園遺跡の範囲よりも広がることが確認された。国見町産業振興課及び教育委員会(現雲仙市教育委員会)による協議の結果、試掘調査の結果を踏まえ、設計変更により遺跡の大部分は盛り土によって保存を行うこととなった。しかし、農道及び用排水路など掘削により遺跡が消滅する部分については、平成 12 年度から平成 16 年度にかけて本調査を実施した。十園遺跡については、『十園遺跡』(辻田・竹中 2004)、『十園遺跡Ⅱ』(竹中・辻田 2005)で報告されている。今回、弥生時代中期から後期の遺構から出土した遺物について再整理を行い、報告する。

-発掘調査の方法及び経過-

本調査は世界測地系を使用し、調査対象範囲(道路・用排水路建設のために遺跡が消滅する範囲)を 20mメッシュで区切り、グリッド法によって行った。1 区から 50 区及びC区、南区を設定し、順次調査を行った。しかし、調査区の立地条件や遺構密度等により必ずしも 20mメッシュの調査区とは限らない。十園遺跡は土層の堆積が薄く、表土を除去するとすぐに遺構検出面という調査区も少なくない。遺跡内には条里制の痕跡が残っていることから、古来より数度の造成工事が行われていたことは間違いないと考えられる。調査では第Ⅰ層(表土、水田耕作土) 及びその下の第Ⅱ層(水田床土及び客土)を重機によって除去し、その後は全て人力で調査を行った。詳細な土層堆積状況は次頁に記す。遺物の取上げは基本的には同一層一括で取上げ、旧石器時代及び縄文時代の一部の遺物についてはドットマップを作成し、取上げた。また、各時代の遺構出土遺物については可能な限り実測し、個別で取上げを行った。発掘は可能な限り下層まで掘下げ、部分的には基盤層の検出を行った。

以下、調査概要を述べる。

旧石器時代

32 区及び 33 区から、旧石器時代の遺物包含層が検出され、剥片尖頭器、台形石器、ナイフ形石器などが集中して出土した。

縄文時代

22 区及び 25 区から、落とし穴状遺構が 3 基検出された。また、32 区から検出された風倒木の埋土中からは縄文時代早期 (平栫式) の土器が 4 個体分出土した。22 区、25 区では 3 基の落とし穴状遺構が検出されている。落とし穴状遺構の埋土からは、時期を特定できるような遺物の出土はなかったが、縄文時代のものと考えられる。

弥生時代

弥生時代中期の住居跡 4 軒(4 区 SB01、SB02・32 区 SB01、SB02)及び環濠 1 条(23・24 区 SD01、12 区 SD03)、弥生時代後期の住居跡 3 軒(27 区 SB01、SB02・29 区 SB02)及び環濠 3 条(26 区 SD01、SD02・12 区 SD03)が検出された。4 区から検出された住居跡(4 区 SB01、SB02)から出土した土器には赤色顔料が塗布されていることから、祭祀に関わるものと考えられる。完形に近い状態まで復元できるものが多く、何らかの祭祀に利用したものを住居跡の落ち込みに廃棄したものと考えられる。また、32 区から検出された円形の住居跡(32 区 SB01)は直径 12mほどの巨大な住居跡で、建替え及び拡張がなされたものである。

奈良・平安時代

47 区から大型の掘立柱建物群、50 区からは溝、35 区からは旧河川検出の祭祀遺構が検出された。47 区から検出された大型の掘立柱建物群は建物軸が周辺にみられる条里遺構と一致していることから『肥前国風土記』に登場する高来郡衙関連の遺構として注目される。掘立柱建物群よりも北に直線距離で約 75m 離れた地点からは、古代の溝(13、14 区 SD01)が検出され、埋土からは石帯が出土した。

室町・鎌倉時代

19 区及び 21 区から製鉄関連遺構が検出された。竪型の製鉄炉本体及び廃滓場の一部が検出された。

-遺跡の地理的・地形的環境-

十園遺跡の地理的・地形的環境については、『十園遺跡』(辻田・竹中 2004)、『十園遺跡Ⅱ』(竹中・辻田 2005)に詳しく述べられているので、参照願いたい。ここでは、遺跡の立地する環境についての概要及び基本層位について説明する。

十園遺跡は、長崎県の南部、島原半島の北側に位置する。雲仙普賢岳から伸びる緩やかに傾斜する火山性山麓扇状地に展開している。海岸から南側に約 1km 離れた土黒川東岸の低丘陵上に位置しており、標高 20～30m を測る。丘陵の両脇は土黒川、多比良川が北上し、その外側には比較的高位の丘陵が続く。遺跡は低丘陵の西側、土黒川の河畔に広がる。

基本層位

十園遺跡が所在する丘陵は大部分が削平を受けている。それは条里制の跡も確認されることから、水田利用のために造成工事が行われていたようである。遺跡内で最も土層堆積が良いのは 32 区である。『十園遺跡』(辻田・竹中 2004)では、32 区付近の 3 箇所について火山灰分析を行った結果を報告している。以下、十園遺跡の基本堆積土層を述べる。

十園遺跡の基本堆積土層は大きく 8 層に分けることができる。

第Ⅰ層　水田耕作土。

第Ⅱ層　旧水田層及び客土。

第Ⅲ層　黒色土　弥生時代及び古代の遺物包含層。

第Ⅳ層　暗赤褐色土(Hue5YR3/2)　アカホヤ火山灰降灰層に準ずる。

第Ⅴ層　黒褐色土(Hue5YR3/1)　炭化物が極少量混入。台形石器出土(黒曜石製)。

第Ⅵa 層　褐色土(Hue10YR4/4)　剥片尖頭器出土(玄武岩製)。下半分がＡＴ火山灰降灰層に準ずる。

第Ⅵb 層　暗褐色土(Hue10YR3/4)　上半分はクラックが入る。炭化物が極少量混入する。

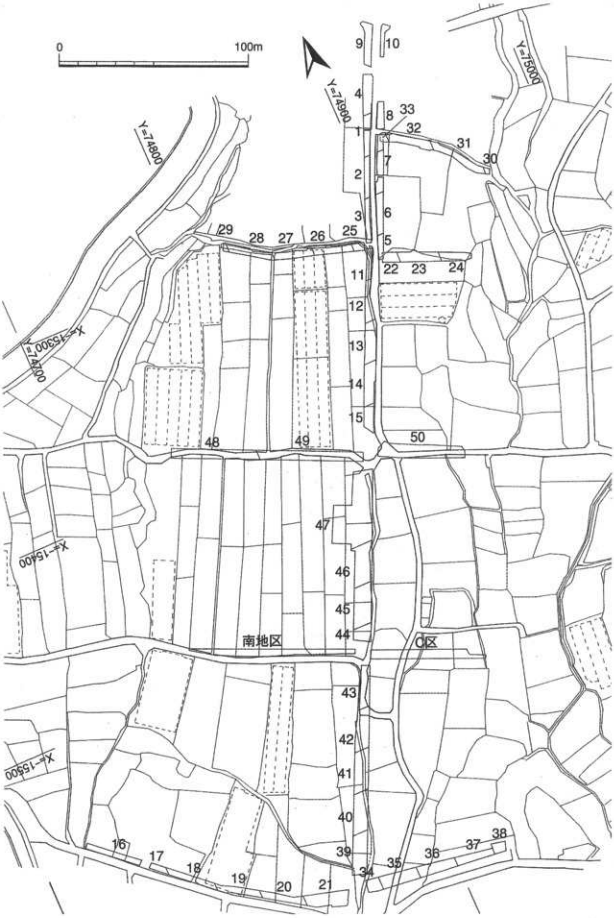
第Ⅶ層　暗赤褐色土(Hue5YR3/2)　非常にきめが細かく、粘質が強い。

第Ⅷ層　明褐色土(Hue7.5YR5/8)　きめが細かく非常に粘質が強い。角閃石安山岩の岩盤層である。

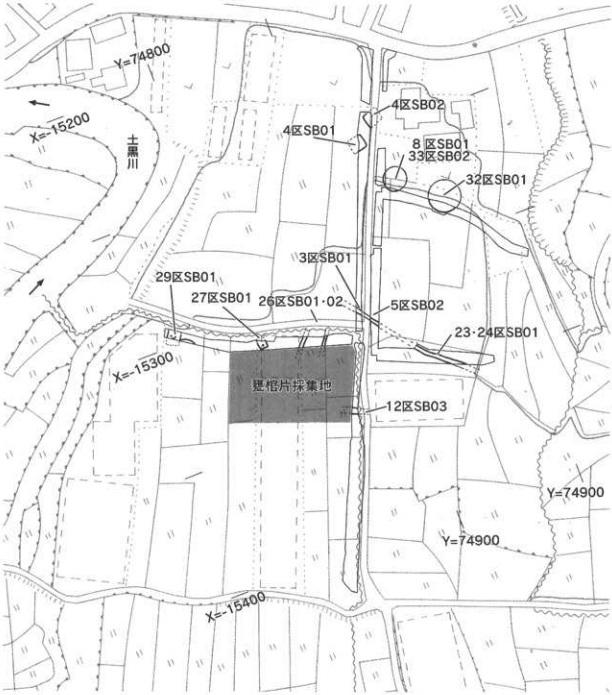
【参考文献】

辻田直人・竹中哲朗　2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書(概報)第 4 集　長崎県国見町教育委員会

竹中哲朗・辻田直人　2005『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書(概報)第 5 集　長崎県国見町教育委員会



第２図　調査区配置図(1/2,000)



第３図　弥生時代の主な遺構配置図(1/1,500)

弥生時代中期から後期の環濠及び住居跡、掘立柱建物跡が検出された。

・弥生時代中期の遺構

住居跡　4軒　4区 SB01、SB02・32区 SB01、SB02

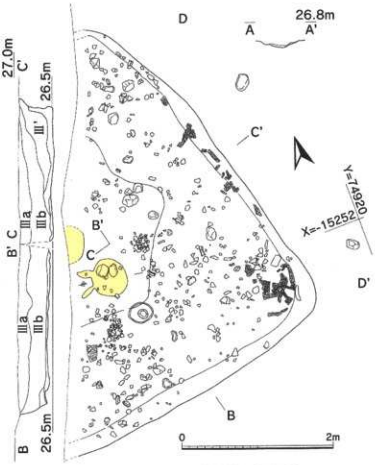
環　濠　1条　23・24区 SD01、12区 SD03

・弥生時代後期の遺構

住居跡　3軒　27区 SB01、SB02・29区 SB02

環　濠　3条　26区 SD01、SB02・12区 SD03

第2節　弥生時代



第4図　4区 SB01 検出状況(1/50)

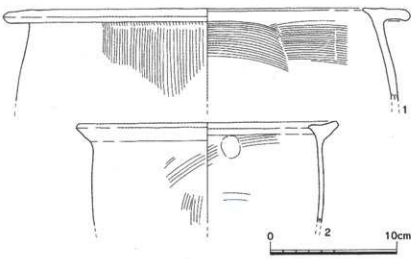
-4区 SB01　竪穴住居跡-

4区からは2軒の竪穴住居跡が検出された。その内の1軒(SB01)は、南北4.5km以上、東西4m以上、平面プランは隅丸方形を呈す。埋土からは土器片を多く含んだ層(Ⅲ層)が検出され、その堆積状況から人為的に入れ込まれたと考えられる。住居内からは床面が検出され、中央付近は踏み固められ硬化している。また、中央部分からは焼土が2箇所検出されており、いずれも炉として利用されていたようである。柱穴は1基検出されており、直径30cm内に12cmほどの柱痕跡が1基確認された。また、住居跡内の南東部分で炭化した木材がまとまって検出されており、住居廃棄の際のものと考えられる。

上記のことから、SB01は自然に埋没したものではなく、人為的に廃棄されたと考えられる。

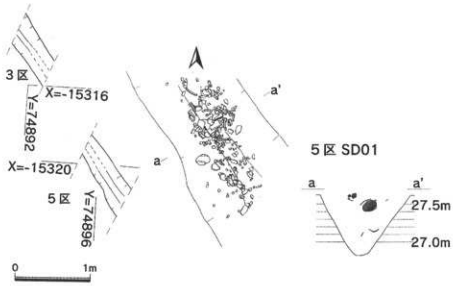
-4区 SB01 出土土器-

1は甕である。胴部上位から口縁部にかけて残存。胴部上位から口縁部にかけてやや丸みをおびて立ち上がり、口縁部はT字状の鋤先状を呈す。口縁部は内外面ともにナデ、胴部外面は縦位のハケ、内面は横位のハケを施す。2は甕である。胴部中位から口縁部にかけて残存。胴部中位から口縁部にかけてやや丸みをおびて立ち上がる。口縁部は外反するが、口唇部は上方に摘まみ出すように成形されている。口縁部は内外面ともにナデ、胴部外面は上位に斜位のハケ、中位に縦位のハケ、内面は斜位のハケ及び部分的に指頭圧痕が確認される。



第5図　4区 SB01 出土土器(1/3)

-3 区 SD01・5 区 SD01-



第 6 図　3 区 SD01・5 区 SD01 検出状況(1/140)
5 区 SD01 遺物出土状況(1/50)

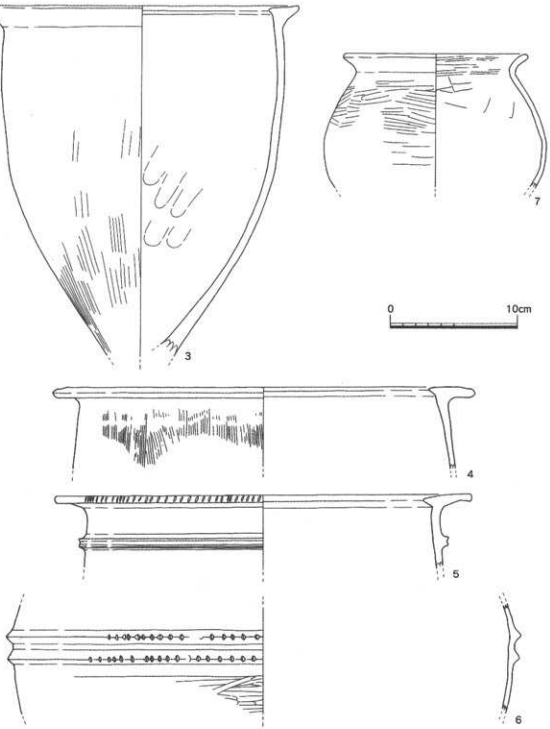
3 区及び 5 区からは断面形状が「V」字型の溝(SD01)が検出された。第 3 図より、23 区、24 区から検出された溝(SD01)の延長線上に検出されているため、1 条の溝として考えられる。3 区、5 区、23 区、24 区から検出された SD01 は、総延長 50m にも及ぶ。SD01 は最大幅 1.7m、最大深度約 1m を測る。

SD01 の底の部分には腐食土を含む黒褐色土が確認でき、その上面から炭化材及び弥生時代の土器片などが出土した。遺物は、SD01 の際の部分ではなく、中心部分から集中して出土しており、そのほとんどは表面及び割れ面が磨耗している。底の部分からは遺物がほとんど出土していないことから、SD01 の底の部分にある程度土が堆積した後に遺物が混入したと考えられる。遺物のほとんどは磨耗している為、あらかじめ破片となった土器片が捨てられた可能性が高い。SD01 から出土した遺物は、弥生時代中期後半の特徴を持つ土器が多く、在地の脚台付甕(第 7 図 3)や佐賀地域から搬入されたと考えられる丹塗りの甕(第 7 図 5)や短頸壺(第 7 図 7)などが出土した。また、『十園遺跡Ⅱ』(竹中・辻田 2005)では丹塗りの広口壺や高坏などが出土したと報告されており、今回報告の SD01 出土の土器とほぼ同一時期と考えられる。これらのことから、SD01 は、弥生時代中期後半の時期に比較的長い時間をかけて自然に埋没したと考えられる。また、第 3 図より、弥生時代中期の住居跡(4 区 SB01、SB02、32 区 SB01、SB02)よりも外側から集落を囲うように検出されていることが確認できる。おそらく、環濠としての役割を担っていた可能性が高い。

-3 区 SD01・5 区 SD01 出土土器-

3 は脚台付甕である。底部は欠損。胴部下位から口縁部にかけて残存。胴部下位から頸部にかけてややゆるみをおびて立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部はややゆ先状を呈し、口唇部は上方に摘まみ出すように成形されている。内外面ともに口縁部はナデを施す。胴部外面は縦位のハケ、内面はナデを施し、中位に指頭圧痕がみられる。4 は甕である。胴部上位から口縁部にかけて残存。口縁部はゆ先状を呈す。内外面ともに口縁部はナデを施し、胴部外面は縦位のハケ、内面は磨耗の為、調整不明である。外面胴部上位から口縁部にかけて「スス」の付着が確認できる。5 は丹塗りの甕である。

胴部上位から口縁部にかけて残存。口縁部は鋤先状を呈し、口唇部には斜位の刻目を施す。外面胴部上位には断面がM字状の突帯が1条貼り付けられている。6は甕である。胴部中位のみ残存。外面胴部はミガキを施し、断面が三角形の刻目突帯が2条貼り付けられている。内面は磨耗の為、調整不明である。形状から、黒髪式土器の甕棺と考えられる。7は丹塗りの短頸壺である。底部は平底で底部から頸部にかけて丸みをおびて立ち上がる。胴部中位に最大径をはかり、頸部から口縁部にかけて外反する。外面胴部はミガキ、内面はナデ、中位に指頭圧痕がみられる。口縁部は内外面ともにミガキを施す。



第7図　3区 SD01・5区 SD01 出土土器(1/3)

-26 区 SD01・SD02-

26 区からは、弥生時代後期から古墳時代初頭の溝(SD01、SD02)が検出された。以下、SD01 と SD02 の詳細を述べる。なお、いずれの遺構も既に『十間遺跡』(竹中・辻田 2005)で報告されているので、詳しくはそちらをご参照願いたい。

26 区 SD01

26 区 SD01 は長さ約 3.2m、最大幅 1m、最大深度 55cm を測る。北側半分は近現代の溝によって遺構上面が削平を受けており、底面のみ確認された。遺構の断面形状は「V」字型と考えられるが、底面の幅が 15cm～20cm と若干広い印象を受ける。壁は段などを付けず掘削されており、その傾斜は東側で 60 度、西側で 50 度ほどである。SD01 の埋土の堆積状況は第 8 図に記載する。第 8 図より、遺物は第Ⅲ層上面から多く出土しており、そのほとんどは比較的大きめの破片であった。弥生時代後期の脚台付甕や高坏、鉢などが出土している。SD01 の埋土堆積状況より、底面からも遺物が出土し、尚且つ同一時期の堆積層を超えて遺物の接合がみられる為、自然に埋没したとは考え難い。

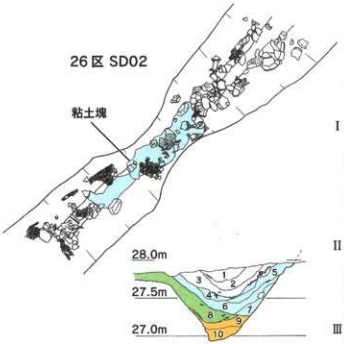
26 区 SD02

26 区 SD01 の西側約 8.1m離れた地点から SD02 が検出された。中近世の溝によって遺構の中央部分の上面が若干削平を受けている。長さ 3.8m、最大幅 1.5m、最大深度約 1m を測る。断面形状は「V」字型と考えられるが、底面の幅が 15cm～20cm と若干広く、壁は段などを付けずに掘削されておりその傾斜は約 50 度ほどである。前述した SD01 と同様の特徴を持つ。SD02 の埋土の堆積状況は第 8 図に記載する。第 8 図より遺物は第Ⅰ層から第Ⅲ層にかけて多く出土しており、そのほとんどは比較的大きめの破片である。土器片とともに炭化材及び粘土塊が出土し、SD02 の壁面に張り付くような状態で出土した土器も確認されている。主に弥生時代後期の脚台付甕が出土しており、その外面には炭化物の付着が確認できるものもあった。おそらく煮炊き用の調理器具として使用されていたのであろう。SD02 の埋土堆積状況より、第Ⅳ層からはほとんど遺物が出土していないことが確認できる。おそらく自然に堆積した層と考えられる。遺構内の埋土の堆積状況及び出土遺物から SD01 及び SD02 はほぼ同一時期に掘削され、同一時期に埋没した可能性が高い。

第 3 図より、26 区 SD01 及び 26 区 SD02 が検出された西側からは、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての住居跡（27 区 SB01、29 区 SB02）が検出されていることが確認できる。おそらく、この 2 条の溝は環濠としての役割を担っていた可能性が高い。また、第 3 図で見るように弥生時代中期の環濠（3 区 SD01）西側の延長線上に弥生時代後期の環濠（26 区 SD01、SD02）の北側延長線が直行すると考えられる。弥生時代中期の環濠の埋没後に新たに弥生時代後期の環濠が掘削されたのか、または、弥生時代中期の環濠が拡大されたものとして弥生時代後期の環濠が存在するのか大きな疑問点が残る。

-12 区 SD03-

26 区 SD01 の東側約 30m の地点から 12 区 SD03 が検出された。古代の溝及び中近世の溝で東西に分断されており、検出面の長さは約 2m、最大幅約 2.4m、最大深度約 60cm を測る。12 区 SD03 から出土した土器はそれほど多くはなく、今回図化できたものは、第 11 図 21 の小型短頸壺のみである。検出された時点で遺構上面は大きく削平を受けている為その全容は把握できない。出土した遺物から、26 区 SD01、SD02 と同時期かもしくは若干新しい時期の溝と考えられる。



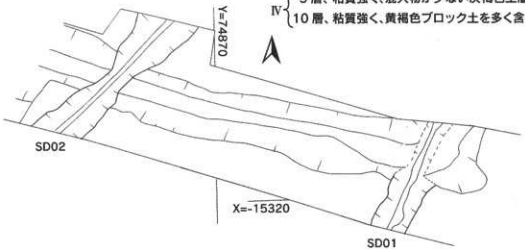
26 区 SD02 の埋土は基本的に黒褐色土である。

I
- 1 層、しまりやや強い。
  全体的に黄褐色粒子及び黒茶褐色粒子を多く含む。
- 2 層、しまり強い。黄褐色粒子を含む。
- 3 層、しまりやや強い。
  炭化物を全体的に多く含み、黄褐色ブロック土及び
  黒茶褐色ブロック土を含む。

II
- 4 層、黄褐色ブロック土(1cm ～ 0.3cm)、
  黒茶褐色ブロック土(0.5cm)を含む。
- 5 層、しまり弱く、黄褐色ブロック土(1cm ～ 0.3cm)を多く含む。
- 6 層、しまり弱く、黄褐色ブロック土(1cm ～ 0.3cm)及び
  黒茶褐色ブロック土(1cm ～ 0.3cm)を含む。
  炭化物片も極少量含む。
- 7 層、粘質非常に強く、黄褐色粒子を少量含む。

III
- 8 層、しまり弱い。
  黄褐色及び黒褐色ブロック土(1cm)、炭化物を多く含む。

IV
- 9 層、粘質強く、混入物が少ない灰褐色土層。
- 10 層、粘質強く、黄褐色ブロック土を多く含む。



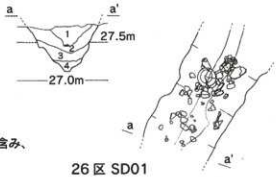
26 区 SD01 の埋土は基本的に黒褐色土である。

1 層、しまり非常に強く、硬質である。
黄褐色粘質土及び黒茶褐色粘質土を極少量含む。

2 層、しまり強く、やや硬質である。
黄褐色粘質のブロック土(1cm)を全体的に含む。

3 層、しまり弱い。弥生中期後半の土器が出土。
黄褐色粘質のブロック土(1 ～ 2cm)を全体的に含み、
黄茶褐色のブロック土(1 ～ 2cm)を少量含む。

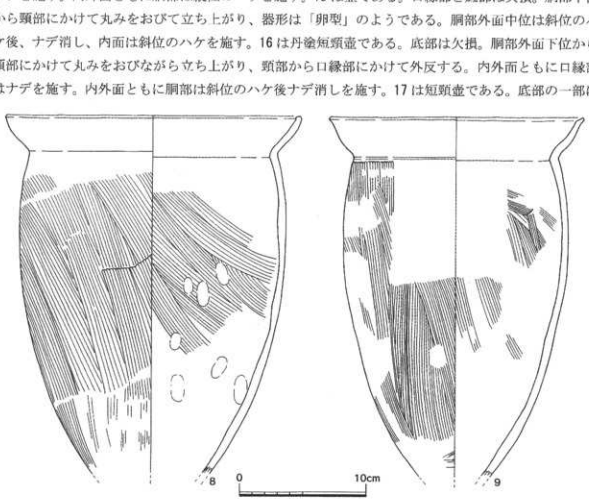
4 層、粘質が強い。
黄褐色粘質土のブロック土を全体的に含み、
遺物はほとんど出土しない。



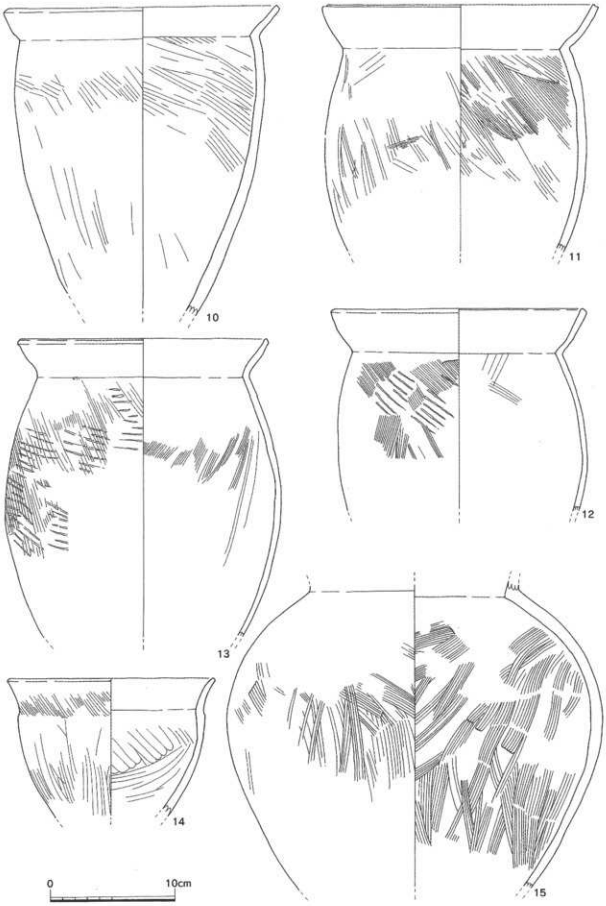
第 8 図　26 区 SD01・SD02 検出状況(1/100)　遺物出土状況(1/50)

-26 区 SD02・12 区 SD03 出土土器-

8 は脚台付甕である。底部は欠損。胴部下位から頸部にかけて丸みをおびながら立ち上がる。頸部から口縁部にかけて外反する。胴部は内外面ともに斜位のハケ、内面中位から下位にかけて指頭圧痕がみられる。また、胴部外面中位には炭化物が付着し、被熱を受けた痕跡が確認できる。9 は脚台付甕である。底部は欠損。胴部下位から頸部にかけて丸みをおびながら立ち上がる。頸部から口縁部下位は内湾し、口縁部は外反する。胴部外面は縦位のハケ、内面は斜位のハケ後、ナデを施す。外面には「スス」の付着が確認できる。10 は脚台付甕である。胴部下位から底部は欠損。胴部下位から頸部にかけて丸みをおびながら立ち上がる。頸部から口縁部にかけて外反する。内外面ともに口縁部はナデ、胴部は斜位のハケを施す。また、胴部外面には煮沸の跡の炭化物がみられる。11 は脚台付甕である。胴部下位から底部は欠損。胴部中位から頸部にかけて丸みをおびて立ち上がり、頸部から口縁部にかけてやや外反する。内外面ともに口縁部はナデ、胴部は斜位のハケを施し、外面には「おコゲ」が確認できる。12 は脚台付甕である。胴部中位から底部は欠損。胴部中位から頸部にかけてやや内湾し、頸部から口縁部にかけて外反する。内外面ともに口縁部はナデを施す。胴部外面は斜位のハケ後タタキ締め、内面は斜位のハケ後部分的にナデ消しを施す。13 は脚台付甕である。胴部下位から底部は欠損。胴部下位から頸部にかけて丸みをおびて立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外反する。内外面ともに口縁部はナデを施す。胴部外面は斜位のハケ後タタキ締め、内面は斜位のハケ後ナデ消しを施す。また、外面の一部分に「スス」の付着がみられる。14 は甕である。底部は欠損。胴部下位から頸部にかけて内湾し、頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部外面は斜位のハケ後ナデ、内面はナデを施す。内外面ともに胴部は縦位のハケを施す。15 は壺である。口縁部と底部は欠損。胴部下位から頸部にかけて丸みをおびて立ち上がり、器形は「卵型」のようである。胴部外面中位は斜位のハケ後、ナデ消し、内面は斜位のハケを施す。16 は丹塗短頸壺である。底部は欠損。胴部外面下位から頸部にかけて丸みをおびながら立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外反する。内外面ともに口縁部はナデを施す。内外面ともに胴部は斜位のハケ後ナデ消しを施す。17 は短頸壺である。底部の一部は

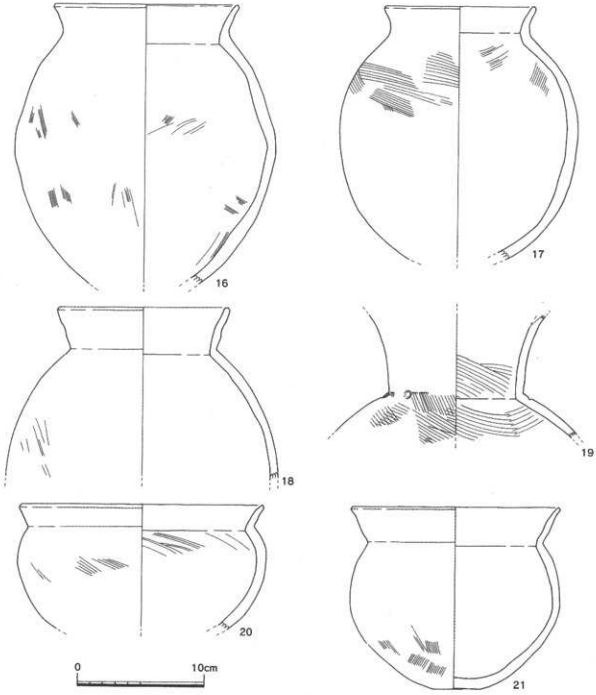


第 9 図　26 区 SD02 出土土器(1/3)



第10図　26区 SD02 出土土器(1/3)

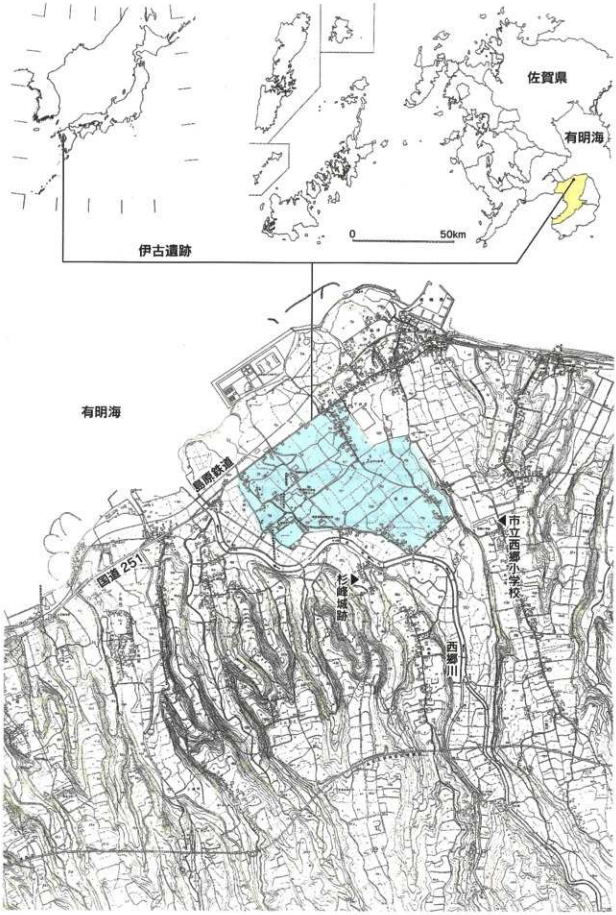
欠損。胴部下位から頸部まで、丸みをおびながら立ち上がり、頸部から口縁部は外反する。内外面ともに口縁部はナデ、胴部上位は斜位のハケ、下位はナデを施す。18 は壺である。胴部中位から下は欠損。胴部中位から頸部まで丸みをおびて立ち上がる。頸部から口縁部にかけて外反する。内外面ともに口縁部はナデ、胴部は斜位のハケ後ナデ消しを施す。19 は長頸壺である。胴部上位から底部にかけて欠損する。胴部上位から頸部にかけて内湾し、頸部は外反する。頸部下には、「竹管文」が 3 箇所確認できる。胴部外面はナデ、内面は斜位のハケ、内面頸部上位はナデ、頸部下位から胴部上位にかけて斜位のハケを施す。20 は小型の壺である。底部は欠損。胴部下位から頸部にかけて丸みをおびながら立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外反する。内外面ともに口縁部はナデ、胴部は斜位のハケ後、ナデ消しを施す。胴部下位には被熱を受けた痕跡がみられる。21 は小型の壺である。底部は平底で、頸部まで丸みをおびながら立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外反する。内外面ともに口縁部はナデ、胴部外面上位はナデ、下位は斜位のハケ後ナデ消し、内面はナデを施す。



第 11 図　26 区 SD02・12 区 SD03 出土土器(1/3)

第1表　十園遺跡出土遺物観察表

図	番号	種別	法量（cm）		技法的特徴		胎土/色調		備考
5	1	甕（口縁部～胴部）	口縁部径(復元) 32.0 残存器高 7.4	外面	頸部～胴部：縦位ハケ 口縁部：横位ナデ		雲母、石英、白色粒子 外面：浅黄橙色（Hue10YR8/4）		焼成良好
				内面	横位ハケ		内面：浅黄橙色（Hue10YR8/4）、黄橙色（Hue10YR8/6）		
	2	甕（口縁部～胴部）	口縁部径(復元) 20.6 残存器高 8.0	外面	斜位ハケ 口縁部：横位ナデ		角閃石、石英、赤色粒子 外面：浅黄橙色（Hue10YR8/3）、にぶい黄橙色（Hue10YR7/2）		焼成良好
				内面	ヨコ・斜位ハケ　胴部：指頭圧痕		内面：黒色（Hue2.5Y2/1）、灰黄色（Hue2.5Y7/2）		
	3	脚台付甕	口縁部径(復元) 24.4 残存器高 27.6	外面	胴部：縦位ハケ 口縁部：ナデ		角閃石、石英、長石、赤色粒子 にぶい橙色（Hue7.5YR6/4）		
				内面	ナデ　胴部中位：指頭圧痕				
	4	甕	口縁部径(復元) 33.2 残存器高 6.5	外面	胴部：縦位ハケ 口縁部：ナデ		角閃石、石英、長石 外面：にぶい褐色（Hue7.5YR5/4）、褐色（Hue7.5YR6/6）		外面上位：スス
				内面	調整：磨滅のため調整不明		内面：浅黄色（Hue2.5YR7/3）、暗灰黄色（Hue2.5Y5/2）		
	5	甕（片口）	口縁部径(復元) 32.4 残存器高 6.9	外面	胴部：ミガキ 口縁部：ミガキ		角閃石、石英、長石、雲母、赤色粒子 明赤褐色（Hue5YR5/6）		
				内面	胴部：ナデ、指頭圧痕				
	6	甕	残存器高 8.7	外面	胴部：ミガキ		角閃石、石英、長石、赤色粒子		
				内面	器種の点数調整不明		外面：黒色（Hue2.5Y2/1）、灰黄色（Hue2.5Y6/2）		
	7	短頸壺（片口）	口縁部径(復元) 14.6 残存器高	外面	胴部：ミガキ 口縁部：ミガキ		石英、長石、雲母、赤色粒子 外面：赤褐色（Hue2.5YR4/6）		
				内面	胴部：ナデ 胴部中位：指頭圧痕		内面：にぶい黄橙色（Hue10YR6/4）、にぶい褐色（Hue7.5YR5/4）		
9	8	脚台付甕	口縁部径(復元) 23.4 残存器高 28.1	外面	胴部上半：斜位ハケ 胴部下位：縦位ハケ		角閃石、白色粒子 外面：浅黄橙色（Hue10YR8/4）、黒色（Hue10YR7/1）		焼成良好 外面中位：コゲ
					口縁部：横位ナデ		黒褐色（Hue10YR3/1）、褐暗赤褐色（Hue2.5YR2/3）		
				内面	胴部上半：斜位ハケ 胴部下半：指頭圧痕		内面：浅黄橙色（Hue10YR8/3）、褐暗赤褐色（Hue2.5YR2/3）		
	9	脚台付甕（口縁部～胴部）	口縁部径(復元) 20.0 残存器高 28.3	外面	縦位ハケ 口縁部：ナデ		角閃石、石英、金雲母、白色粒子、赤色粒子 外面：にぶい黄橙色（Hue10YR7/4）、褐灰色（Hue10YR4/1）		外面下位：スス
				内面	斜位ハケ 口縁部：ナデ		黒褐色（Hue10YR3/1） 内面：にぶい黄橙色（Hue10YR7/4）、褐色（Hue5YR6/6）		
							黒褐色（Hue10YR3/1）		
	10	脚台付甕	口縁部径 21.9 残存器高 24.8	外面	胴部上位：斜位ハケ 胴部下半：縦位ハケ		角閃石、石英、白色粒子、赤色粒子 外面：橙色（Hue7.5YR7/6）、暗褐黒色（Hue5YR3/2）		外面：コゲ
					口縁部：ナデ		黒色（Hue7.5YR1.7/1）		
				内面	胴部上半：斜位ハケ 口縁部：ナデ		内面：浅黄橙色（Hue10YR8/4）、橙色（Hue7.5YR7/6） 黒色（Hue7.5YR1.7/1）		
	11	脚台付甕	口縁部径(復元) 22.1 残存器高 11.8	外面	胴部：縦位・斜位・横位ハケ 口縁部：ナデ		角閃石、石英、白色粒子、赤色粒子 外面：にぶい橙色（Hue7.5YR7/4）、黒色（Hue10YR1.7/1）		外面一部：コゲ
				内面	胴部：斜位ハケ 口縁部：ヨコナデ		炭褐色（Hue7.5YR4/2） 内面：浅黄橙色（Hue10YR8/4）		
	12	脚台付甕	口縁部径 20.4 残存器高 16.2	外面	胴部上位：ハケ後ケズリ 口縁部：ナデ		角閃石、石英、白色粒子 外面：にぶい黄橙色（Hue10YR7/4）、黒色（Hue2.5Y2/1）		焼成やや良好
				内面	胴部：横位ハケ 口縁部：ナデ		褐灰色（Hue10YR4/1） 内面：黄橙色（Hue7.5YR7/8）、褐灰色（Hue10YR4/1）		
	13	脚台付甕	口縁部径 20.0 残存器高 23.8	外面	胴部上半：タタキ後斜位ハケ 胴部下位：ナデ		石英、金雲母、白色粒子、赤色粒子 外面：浅黄橙色（Hue10YR8/3）、黒褐色（Hue10YR3/1）		外面一部：スス
				内面	胴部上半：斜位ハケ　下位：ナデ		内面：浅黄橙色（Hue10YR8/4）、にぶい黄橙色（Hue10YR6/3）		
	14	甕	口縁部径 16.6 残存器高 11.0	外面	胴部：縦位ハケ 口縁部：斜位ハケ後ナデ		角閃石、白色粒子 外面：にぶい黄橙色（Hue10YR7/4）、灰黄褐色（Hue10YR6/2）		
				内面	胴部：斜位ハケ 口縁部：ナデ		内面：にぶい黄橙色（Hue10YR7/4）、灰褐色（Hue10YR4/1） 褐色（Hue5YR5/8）		
	15	壺	残存器高 24.7	内外面	胴部上半：斜位ハケ 下位：ナデ		角閃石、石英、白色粒子、赤色粒子 外面：褐色（Hue7.5YR7/6）、明赤褐色（Hue5YR5/8）		焼成良好
							内面：褐色（Hue7.5YR7/6）		
11	16	短頸壺（片口）	口縁部径(復元) 14.6 残存器高 22.0	外面	胴部：斜位ハケ後ナデ 口縁部：ナデ		角閃石、石英、白色粒子、赤色粒子 外面：明赤褐色（Hue5YR5/8）、黒色（Hue7.5YR2/1）		焼成良好
				内面	胴部：斜位ハケ後ナデ 口縁部：ナデ		内面：明赤褐色（Hue5YR5/8）		
	17	短頸壺	口縁部径(復元) 12.0 残存器高 19.9	内外面	胴部上半：斜位ハケ 胴部下位：ナデ		角閃石、白色粒子、赤色粒子 外面：にぶい赤褐色（Hue5YR4/4）、褐灰色（Hue10YR4/1）		焼成やや良好
					口縁部：ナデ		内面：赤褐色（Hue6YR4/6）、黒褐色（Hue5YR3/1） 褐灰色（Hue10YR5/1）		
	18	壺	口縁部径(復元) 13.6 残存器高 13.5	外面	胴部：斜位ハケ後ナデ 口縁部：ナデ		角閃石、石英、白色粒子、赤色粒子 外面：明赤褐色（Hue5YR5/6）		
				内面	胴部：ナデ		内面：明赤褐色（Hue5YR5/6）		
	19	二重口縁壺	残存器高 9.5	外面	胴部：斜位ハケ 頸部：斜位ハケ		金雲母、白色粒子 外面：にぶい黄橙色（Hue10YR7/4）、黒褐色（Hue10YR3/1）		頸部下：竹管文
				内面	胴部：斜位ハケ		内面：浅黄色（Hue2.5Y7/3）、黒色（Hue10YR2/1）		
	20	小型短頸壺	口縁部径 19.2 残存器高 9.8	外面	胴部：ハケ後ナデ 口縁部：ナデ		金雲母、白色粒子、赤色粒子 外面：浅黄橙色（Hue10YR8/4）、にぶい赤褐色（Hue2.5YR5/4）		焼成良好
				内面	胴部：ハケ後ナデ		内面：浅黄橙色（Hue10YR8/4）、にぶい赤褐色（Hue2.5YR5/4）		
	21	小型短頸壺	口縁部径(復元) 16.4 器高 14.3	外面	胴部上半：ナデ 胴部下半：斜位ハケ		角閃石、石英、白色粒子 外面：浅黄橙色（Hue10YR8/4）、黒色（Hue10YR1.7/1）		焼成良好
					口縁部：ナデ		内面：浅黄橙色（Hue10YR8/4）、褐色（Hue7.5YR6/6）		
				内面	胴部：ナデ		褐灰色（Hue7.5YR4/1）		



第12図　伊古遺跡位置図(1/20,000)

第2章　伊古遺跡

第1節　調査の経緯

-発掘調査にいたる経緯-

平成13年度に長崎県島原振興局より、古江地区県営圃場整備事業の計画があるとの紹介を受け、瑞穂町教育委員会（現雲仙市教育委員会）が主体となり、平成14・15年度に事業予定地内の遺跡範囲確認調査（試掘調査）を実施した。その結果、従来の周知遺跡である伊古遺跡をはるかに越える範囲で遺構・遺物の発見が確認され、伊古遺跡の周知範囲は南東に大きく広がりをみせることとなった。島原振興局・長崎県学芸文化課・西郷土地改良区・瑞穂町教育委員会（現雲仙市教育委員会）による協議の結果、試掘調査の結果を踏まえ、設計変更により遺跡の大部分は盛り土によって保存を行うこととなったが、遺跡の消滅する部分については発掘調査を行うこととなった。本調査は平成17年度から平成20年度まで、3ヶ年にわたって実施した。伊古遺跡は『伊古遺跡』（山下2008）、『伊古遺跡Ⅱ』（辻田2009）、『伊古遺跡Ⅲ』（辻田他2010）で報告されている。今回、D6区調査区外の東側から出土した弥生時代中期から弥生時代後期の土器について再整理を行い、報告する。

-発掘調査の方法及び経過-

本調査は世界測地系を使用し、調査対象範囲（道路・用排水路建設のために遺跡が消滅する範囲）を、20mメッシュまたは4mメッシュに区切り、グリッド法によって行った。A区、B区、C区、D1区、D2区、D3区、D4区、D5区、D6区、E区、E′区、F区、F′区、G区、H区、I区、J区、JT1区、JT2区、K1区、K2区、K3区、K4区、K5区、K6区、L区、M区、N区、O1区、O2区、O3区、O4区、O5区、P1区、P2区、Q1区、Q2区、Q3区、Q4区、R区、S区、T区、U区、V区を設定し、順次調査を実施した。しかし、調査区の立地条件及び遺構密度などにより、必ずしも20m及び4mメッシュの調査区とはなっていない。

現在、伊古遺跡の範囲のほとんどが水田として利用されている。条里制の痕跡も確認でき、これまでに数度の造成工事が行われていたと考えられる。したがって、表土を除去すると遺物包含層が全く残っておらず、基盤層に掘り込まれた遺構確認面が露出している部分も見かけられた。各調査区の表土は重機で掘削を行ったが、再度重機によって遺構確認面及び遺物包含層まで掘削した部分もある。

遺物については、遺物包含層から出土したものは同一層一括で取上げ、甕棺や溝など遺構に関わるものについては可能な限り実測し個別に取上げを行った。また調査の進捗状況によって段階的に写真撮影を行い、縄文時代の文化層と考えられる包含層から出土した遺物については基本的にドットマップを作成している。

伊古遺跡では縄文時代草創期末から中世に至るまでの様々な遺構及び遺物が出土している。以下調査概要を述べる。

縄文時代

縄文時代草創期末の細石器群が検出されている。『伊古遺跡Ⅱ』（辻田2009）から、雲仙より続く丘陵崖下で集中して検出されていることから、洞窟遺跡をイメージさせる「崖下遺跡」と考えられる。土器や石鏃（『伊古遺跡Ⅱ』では尖頭状石器で報告）、石斧が共伴しており、有明海沿岸の草創期末の状況を考える上で重要な成果である。

弥生時代

甕棺墓及び木製品水漬遺構、環濠と考えられる溝が検出されている。検出された甕棺は全て小児棺で、肥後地域の黒髪式の特徴を有する甕が多い。また、木製品水付遺構からは、弥生時代後期の肥前型器台及び高坏、脚台付甕、長頸壺の外面に絵が描かれているものなどが出土している。環濠と考えられる溝からは、弥生時代中期後半の甕棺の破片などが出土している。また、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての溝内からは、脚台付甕や長胴甕、古式土師器などが出土した。

中世

道路状遺構や竪穴状遺構、製鉄関連遺構や掘立柱建物群、土坑墓などが検出された。おそらく大規模な集落が存在していたことは間違いないと考えられる。中国製陶磁器が多く出土し、また、祭祀遺構からは、土師器が集中して出土した。また、瓦器碗及び石鍋（未報告）などの遺物が出土しており、その時期は12世紀から13世紀に属する。

-遺跡の地理的・地形的環境-

伊古遺跡周辺の地理的・地形的環境及び立地環境については、『伊古遺跡』（山下2008）、『伊古遺跡Ⅱ』（辻田2009）、『伊古遺跡Ⅲ』（辻田他2010）に詳しく述べられているので、参照願いたい。ここでは、遺跡の立地する環境についての概要及び今回報告を行う地点について説明する。

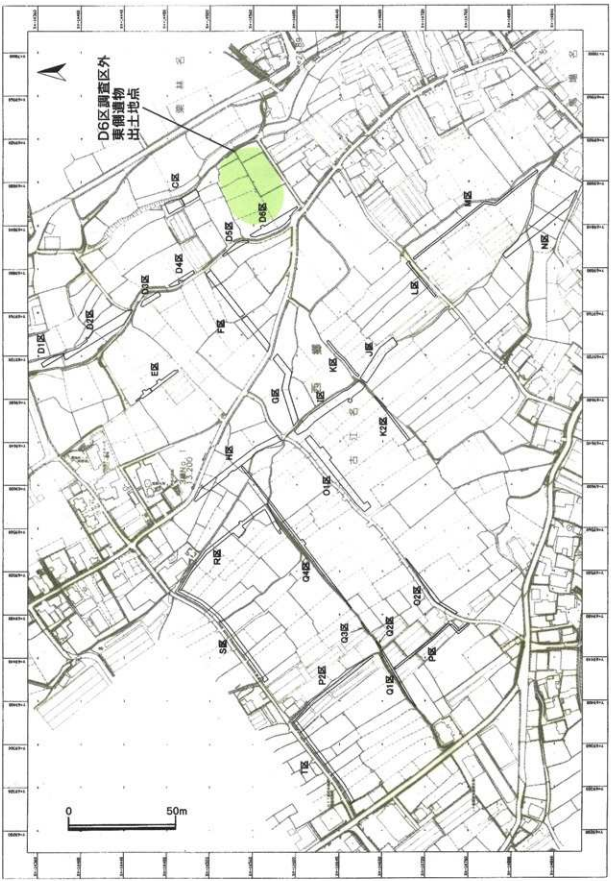
伊古遺跡は、長崎県の南部、島原半島の北側に位置する。雲仙普賢岳から伸びる緩やかに傾斜した火山性扇状地に占地する。標高は14mから20mを測り、遺跡の西側には西郷川が流れ、東端は雲仙普賢岳より続く舌状の丘陵が海岸付近まで延びており、川と丘陵に挟まれた平坦部に展開している。伊古遺跡の南西側には中世の有馬の家臣であった進藤権太夫の居城である「杉峰城跡」が隣接している。

平成17年度から平成20年度に実施した圃場整備に伴う発掘調査の結果、旧河川跡と考えられる水成堆積による砂礫層が確認された。現在の西郷川は西側に延びる丘陵の先端部（杉峰城跡）付近で大きく蛇行し、有明海へと注いでいる。しかし、発掘調査で旧河川跡が検出されていることから、西郷川は蛇行せずそのまま北上もしくは西郷川の支流が北上していた時期があったと考えられる。

今回報告する地点は、圃場整備の工事中に多量の遺物が発見され、急遽調査が実施された部分である。D6区調査区外東側、市道（ＣＲ区）北側に位置する。D6区からは竪穴状遺構及び旧河川跡や祭祀遺構など、主に中世の遺構が集中して検出された。また、市道（ＣＲ区）からは、弥生時代中期後半の小児甕棺が検出された。甕棺墓が検出されている為、墓域の可能性も考慮し調査を行ったが、残念ながら遺構の検出までは至らなかった。しかし遺物は弥生時代から中世に至るまで様々なものが出土している。今報告では、弥生時代中期後半から弥生時代後期後半の遺物を報告する。

【参考文献】

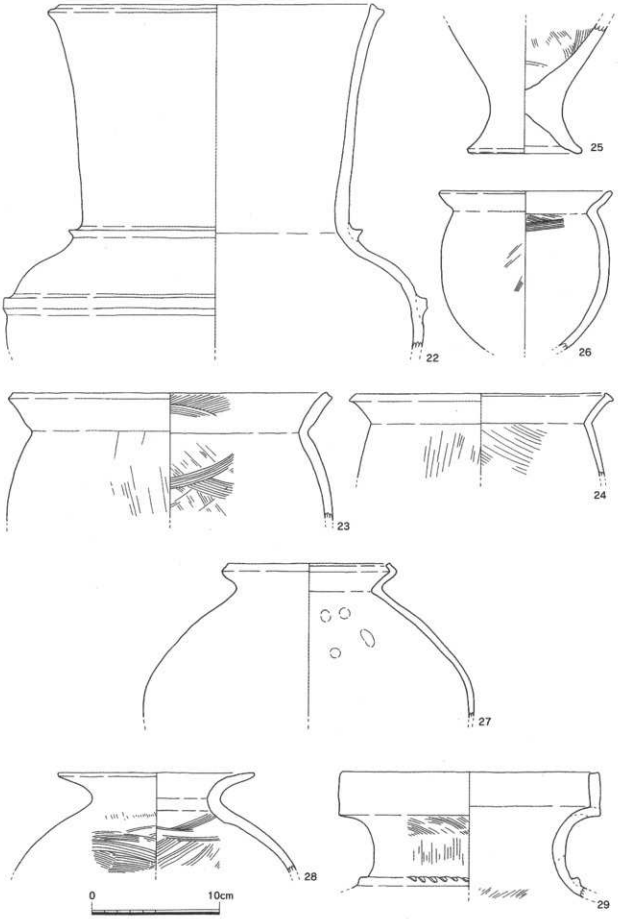
山下美郷　2008『伊古遺跡』雲仙市文化財調査報告書(概報)第5集　長崎県雲仙市教育委員会
辻田直人　2009『伊古遺跡Ⅱ』雲仙市文化財調査報告書　第6集　長崎県雲仙市教育委員会
辻田直人他　2010『伊古遺跡Ⅲ』雲仙市文化財調査報告書　第8集　長崎県雲仙市教育委員会



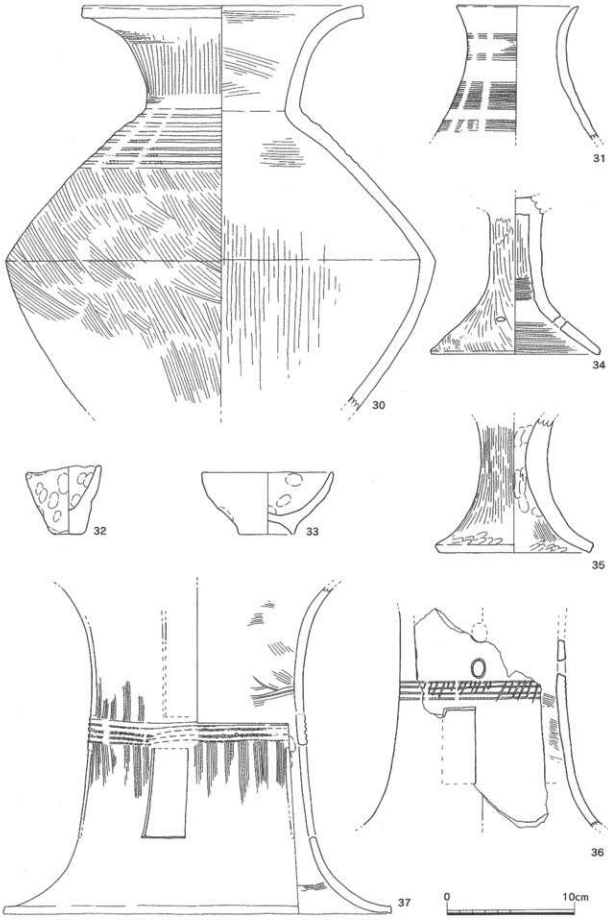
第 13 図　調査区配置図(1/1,775)

-D6 区調査区外東側出土土器-

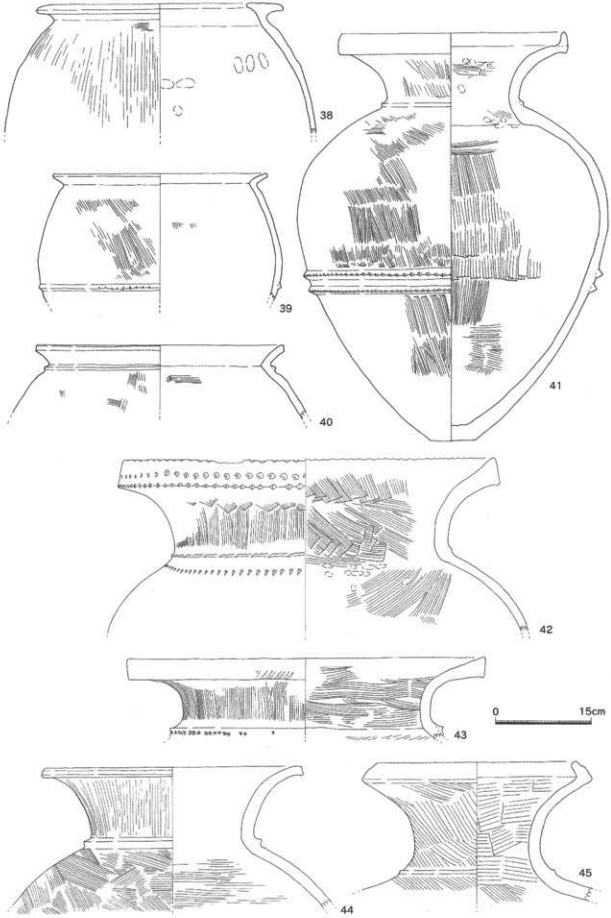
22 は丹塗りの広口壺である。胴部外面上位には断面が台形状の突帯が、頸部外面には断面が三角形の突帯が 1 条貼付けられている。胴部上位から頸部にかけて丸みをおび、頸部はややすぼまり、頸部から口縁部にかけて外反する。胴部外面は縦位のハケ後横位のナデ、内面は横位のナデを施す。頸部内面は指頭圧痕が、外面及び口縁部内面に赤色顔料が確認される。23 は脚台付甕である。胴部中位から頸部にかけて、ゆるやかに丸みをおびながら立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部外面はナデ、内面は斜位のハケを施す。胴部外面は縦位のハケ後ナデ、内面は斜位のハケ後、ナデを施す。24 は脚台付甕である。胴部上位から頸部にかけて丸みをおび、頸部から口縁部にかけて外反する。内外面ともに口縁部は斜位のハケ後ナデを施す。胴部外面は縦位のハケ、内面は斜位のハケを施す。25 は脚台付甕の脚部である。脚台部は裾部にかけて、「八の字」に広がり、脚台と胴部の接合部から胴部下位にかけて外反する。内外面ともに脚台はナデを施す。胴部外面はナデ、内面は斜位のハケ及びナデを施す。26 は丹塗りの小型壺である。底部は欠損。弥生中期末～後期前半。胴部下位から頸部まで丸みをおび、口縁部は外反する。内外面ともに口縁部はナデ、胴部は斜位のハケ後ナデを施す。胴部外面中位から下位にかけて「ススス」が付着。27 は二重口縁壺である。胴部中位から頸部にかけてやや丸みをおび、口縁部は「くの字」を呈す。内外面ともに口縁部及び胴部はナデを施す。胴部内面には、指頭圧痕がみられる。28 は壺である。弥生後期～終末。胴部上位から頸部にかけて丸みをおび、頸部はすぼまり、頸部から口縁部にかけて大きく外反する。器壁は全体的に厚い。胴部外面は横位のハケ、内面は斜位のハケ、頸部外面は斜位のハケを施す。内外面ともに口縁部はナデを施す。29 は二重口縁壺である。頸部下から口縁部にかけて外反しながら立ち上がり、口縁部はやや垂直に立ち上がる。外面頸部下には断面が三角形の突帯が貼り付けられており、6 つの刻目がみられる。内外面ともに口縁部はナデを施し、頸部外面は縦位のハケ、内面はナデを施す。30 は朝顔形口縁壺である。胴部下位から頸部にかけて屈曲する。胴部中位に最大径をはかり、頸部はすぼまる。頸部から口縁部にかけて大きく外反する。頸部のつけ根から肩部にかけて 9 ないし 10 条の凹線がみられる。頸部外面は縦位のハケ、内面は横位のハケを施す。肩部外面は凹線、内面は横位のハケ、胴部外面は斜位のハケ、下部はミガキ、内面は縦位のハケ後ナデを施す。31 は長頸壺である。頸部から口縁部にかけてやや外反する。外面頸部上位、中位、下位に 15 条を一単位とする沈線文が 3 つみられる。全体的に磨耗が厳しい為、部分的に沈線文が削れている。内外面ともに口縁部はナデを施し、頸部外面は縦位のハケ後ナデ、内面はナデを施す。32 は手捏ね土器の甕である。底部から口縁部にかけてやや外反する。全体的に器壁は厚い。内外面ともに、指頭圧痕及びナデを施す。33 は丹塗りの浅鉢である。底部は上げ底で底部から口縁部にかけてやや丸みをおびる。内外面ともに底部から口縁部にかけてナデを施し、胴部内面には指頭圧痕がみられる。34 は高坏である。全体的に外面は横位のナデ後、縦位のハケを施す。脚柱部・坏部外面はミガキを施し、脚柱部内面上位に縦位のケズリ、下部 2cm に横位のナデを施し、台裾部は横位のハケを施す。台裾部上部に 3 ヶ所の穿孔あり。35 は器台である。外面は縦位のハケ後ナデ、内面は縦位のケズリ後ナデを施し、指頭圧痕がみられる。裾部には斜位のハケ、端部は横位のナデ後ミガキを施す。36 は肥前型器台である。胴部中位から裾部にかけて開く。胴部中位には、4 条の沈線が巡り、斜位の刻目を施す。沈線上方には円形透かし、下方には方形透かしを施す。胴部外面上位はナデ、中位から裾部にかけて横位ハケ後ナデ、内面は斜位のハケ後ナデを施す。37 は肥前型器台である。底部は裾広がりで、底部から胴部上位にかけて外反する。胴部中位には、4 条の沈線文と斜位の刻目を施す。外面胴部中位より上位と下位に縦位のハケ、内面上位には、横位のハケ及び、縦位ハケ後ナデを施す。下位は指頭圧痕と横位ハケ後ナデを施す。残存してないが胴部上位に 4 ヶ所、胴部下位に



第 14 図　D6 区調査区外東側　出土土器(1/3)

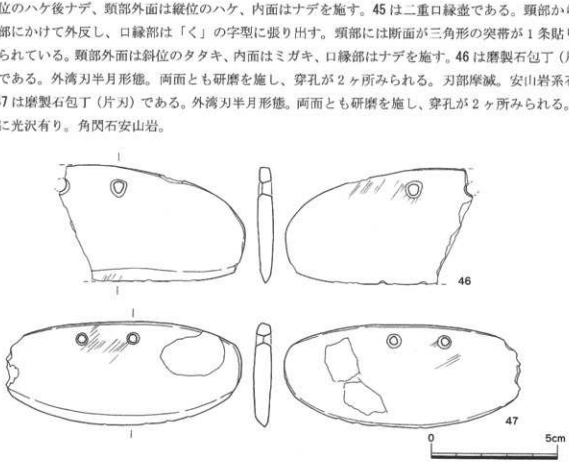


第 15 図　D6 区調査区外東側　出土土器(1/3)



第 16 図　D6 区調査区外東側　出土土器(1/6)

4ヶ所の透かしを施していたと考えられる。38は甕である。胴部上位から頸部にかけて丸みをおび、口縁部は鋤先状口縁を呈す。胴部外面は縦位のハケ後ナデ、内面はナデ後ミガキを施し、指頭圧痕がみられる。内外面ともに口縁部はナデを施す。39は甕である。胴部中位から頸部にかけてやや丸みをおび、頸部から口縁部にかけて外反する。胴部中位には断面が三角形の突帯が1条貼付けられており、浅い刻目を施す。内外面ともに口縁部は丁寧な横位のナデを施し、胴部外面は、斜位のハケ後横位のナデ、内面は縦位のハケ後横位のナデを施す。40は甕である。胴部上位から頸部にかけてやや丸みをおび、頸部はすぼまる。頸部から口縁部にかけて外反する。頸部外面には断面が三角形の突帯を1条貼付けられており、内外面ともに口縁部はナデ、胴部外面は縦位のハケ後ナデ、内面は横位のナデを施す。41は二重口縁壺である。底部は平底で、頸部にかけて丸みをおびる。胴部中位には断面形状が三角形の突帯が2条貼付けられており、刻目を施す。頸部から口縁部にかけて外反し、口唇部はほぼ垂直に立ち上がる。頸部外面に断面が三角形の突帯が1条貼付けられる。胴部外面下位は縦位のハケ、上位は斜位のハケ、突帯部分はナデ、内面は上位及び下位は斜位のハケ、中位は縦位のハケを施す。頸部外面は斜位のハケ、内面は横位のハケ後横位のナデ、指頭圧痕がみられる。内外面ともに口縁部はナデを施す。42は壺である。胴部中位から頸部にかけて丸みをおび、口縁部は外反する。口唇部は細い波状。外面口縁部の屈曲部には刻目、平坦部には刺突状の文様を施す。外面肩部にハケ工具による装飾を施す。胴部外面はハケ後ナデ、内面は斜位のハケ及び指頭圧痕を施す。頸部外面は斜位のハケ及び縦位のハケ、内面は斜位のハケを施す。43は壺である。弥生時代後期。頸部には、断面がM字形の突帯が1条貼り付けられており、刻目を施す。頸部から口縁部まで外反し、口縁部から口唇部まではやや垂直に立ち上がる。頸部外面は縦位のハケ、内面は横位のハケを施す。44は壺である。弥生後期。胴部上位から頸部にかけて丸みをおび、頸部から口縁部は外反し、口唇端部は断面方形で外側につまみ出す。頸部には断面が三角形の突帯が1条貼付けられている。胴部外面は斜位のハケ、内面は横位のハケ後ナデ、頸部外面は縦位のハケ、内面はナデを施す。45は二重口縁壺である。頸部から口縁部にかけて外反し、口縁部は「く」の字型に張り出す。頸部には断面が三角形の突帯が1条貼り付けられている。頸部外面は斜位のタタキ、内面はミガキ、口縁部はナデを施す。46は磨製石包丁（片刃）である。外湾刃半月形態。両面とも研磨を施し、穿孔が2ヶ所みられる。刃部摩滅。安山岩系石材。47は磨製石包丁（片刃）である。外湾刃半月形態。両面とも研磨を施し、穿孔が2ヶ所みられる。刃部に光沢有り。角閃石安山岩。



第17図　D6区調査区外東側出土石器(2/3)

第2表 伊古道跡 出土遺物観察表(土器)

図	番号	種別	法量(cm)		技法的特徴		胎土/色調	備考
14	22	鉢 (丹塗り)	口縁部径(復元) 残存高	24.4 27.0	外面 口縁・胴部:横位ナデ　頸部:縦位ハケ後横位ナデ 内面 横位ナデ		石英、長石、雲母 外面:明赤褐色(Hue2.5YR5/8) 内面:明赤褐色(Hue2.5YR5/8)、橙色(Hue5YR6/6)	焼成良好
	23	鉢台付甕	口縁部径(復元) 残存高	24.6 10.1	外面 口縁部:ナデ　胴部:縦位ハケ後ナデ 内面 口縁部:斜位ハケ　頸部:ナデ 胴部:縦位ハケ後部分的にナデ		角閃石、赤・白色粒子、石英 外面:浅黄橙色(Hue10YR8/3)、灰黄褐色(Hue10YR6/2) 内面:浅黄橙色(Hue7.5YR8/4)	焼成良好
	24	鉢台付甕	口縁部径(復元) 残存高	19.6 6.6	外面 口縁部:横位ハケ後ナデ　胴部:縦位ハケ 内面 口縁部:斜位ハケ後ナデ　胴部:ハケ		金雲母、白色粒子、石英 外面:浅黄橙色(Hue10YR8/4) 内面:浅黄橙色(Hue10YR8/4)	焼成良好
	25	鉢台付甕 (脚台部)	残存高 底径	10.3 9.1	外面 口縁部:横位ハケ後ナデ 胴部:縦位ハケ 内面 口縁部:斜位ハケ後ナデ　胴部:ハケ 脚台部:ナデ		角閃石、石英、赤・白色粒子 内外面:にぶい黄橙色(Hue10YR7/4) 外面:黒褐色(Hue10YR3/1)、橙色(Hue7.5YR6/6) 内面:明赤褐色(Hue5YR5/6)、灰色(Hue10YR4/1)	焼成良好
	26	小型壺 (丹塗り)	口縁部径(復元) 残存高	13.2 12.5	外面 口縁部:ナデ　胴部:斜位ハケ後ナデ 内面 口縁部:ナデ　胴部上位:斜位ハケ 胴部中位～下位:ハケ後ナデ		角閃石、白色粒子、石英　外面:明赤褐色(Hue5YR5/6) 黒色(Hue7.5YR1.7/1)、にぶい黄橙色(Hue10YR7/3) 内面:赤褐色(Hue5YR4/6)	焼成良好 薄付き
	27	二重口縁壺	口縁部径(復元) 残存高	12.6 12.0	外面 ナデ 内面 口縁部:ナデ　胴部上位:指頭圧痕 胴部中位:ナデ		角閃石、白・赤色粒子　外面:明赤褐色(Hue5YR5/6) にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)、褐灰色(Hue10YR4/1) 内面:明赤褐色(Hue5YR5/6)	
	28	壺	口縁部径(復元) 残存高	15.4 7.7	外面 口縁部:ナデ　胴部:斜位ハケ、縦位ハケ 内面 口縁部:ナデ　胴部:横位ハケ、斜位ハケ		角閃石、白色粒子、金雲母、石英 内外面:にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)、黒褐色(Hue7.5YR3/1) 内面:明赤褐色(Hue5YR5/6)	
	29	二重口縁壺	口縁部径(復元) 残存高	20.0 9.9	外面 口縁・突帯部:ナデ 内面 口縁部:ナデ　頸部下位:斜位ハケ		角閃石、赤色粒子、石英 外面:灰黄褐色(Hue10YR7/6)、褐灰色(Hue10YR4/1) 内面:浅黄橙色(Hue10YR8/4)	焼成良好
	30	壺	口縁部径(復元) 残存高	22.2 31.9	外面 口縁部:ナデ　頸部:縦位ハケ後ナデ 胴部上半:斜位ハケ　下半:斜位ハケ後ナデ・ミガキ 内面 口縁部:ナデ　頸部:横位ハケ　胴部:ハケ後ナデ		角閃石、赤色粒子、石英、長石 外面:橙色(Hue7.5YR7/6)、にぶい黄橙色(Hue10YR7/4) 内面:浅黄橙色(Hue10YR8/4)、褐灰色(Hue10YR6/1)	
	31	長頸壺	口縁部径(復元) 残存高	9.4 10.9	外面 口縁部:ナデ　頸部:縦位ハケ後ナデ、沈線文 内面 ナデ		角閃石、白・赤色粒子、石英、金雲母 外面:浅黄橙色(Hue10YR8/4)、褐灰色(Hue10YR4/1) 内面:にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	焼成良好
	32	甕 (ミニチュア)	口縁部径 器高 底径	3.9 5.4 2.0	外面 口縁部:指頭圧痕 内面 指頭圧痕		角閃石、白色粒子 内外面:浅黄橙色(Hue10YR8/3)、褐灰色(Hue10YR4/1)	
	33	浅鉢 (ミニチュア) (丹塗り)	口縁部径 器高 底径(復元)	10.1 4.9 4.2	外面 ナデ、指頭圧痕 内面 ナデ、指頭圧痕		白色粒子、雲母粒子 内外面:浅黄橙色(Hue10YR8/3)、赤褐色(Hue2.5YR4/6)	
15	34	高坏 (脚台部)	残存高 底径	12.4 13.4	外面 横位ナデ後縦位ハケ　脚注部:ミガキ 内面 脚注部:横位ナデ後縦位ヘラケズリ 脚部:斜位ハケ後ナデ		赤色粒子、石英 外面:橙色(Hue7.5YR6/6) 内面:橙色(Hue7.5YR6/6)	朱孔
	35	器台	残存高 底径	10.5 12.4	外面 脚注部:縦位ハケ後ナデ・ミガキ 脚部:ナデ、ミガキ 内面 脚注部:ヘラケズリ　脚部:斜位ハケ、ナデ		石英 外面:浅黄橙色(Hue10YR8/4) 内面:にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	
	36	器台	胴部径(復元) 残存高	13.0 17.2	外面 脚部上半:ナデ　脚部下半:横位ハケ後ナデ 内面 脚部上半:ナデ　脚部下半:斜位ハケ後ナデ		角閃石、白・赤色粒子、石英、 内外面:にぶい黄橙色(Hue10YR7/3) 外面:赤褐色(Hue5YR4/6)、褐灰色(Hue7.5YR4/1) 内面:橙色(Hue5YR6/6)	
	37	器台	残存高 底径(復元)	25.7 30.6	外面 横位ハケ後ナデ　脚部中位:逆位ハケ、沈線文 内面 脚部上位:横位ハケ、縦位ハケ、ナデ 脚部下位:指頭圧痕、横位ハケ後ナデ		角閃石、白・赤色粒子、石英 外面:にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)、褐灰色(Hue10YR6/1) 内面:にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	
	38	甕	口縁部径 残存高	38.4 20.2	外面 口縁部:ナデ　胴部:縦位ハケ後ナデ・ミガキ 内面 口縁部:ナデ　胴部:ナデ後ミガキ、指頭圧痕 胴部下位:指頭圧痕、横位ハケ後ナデ		石英、長石、雲母 外面:浅黄橙色(Hue10YR8/4) 内面:にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	
	39	甕	口縁部径(復元) 残存高	33.2 20.2	外面 口縁部:縦位ナデ　胴部:斜位ハケ後ナデ 内面 口縁部:横位ナデ　胴部:縦位ハケ後横位ナデ		角閃石、白色粒子、金雲母、石英 外面:浅黄橙色(Hue10YR8/3) 内面:橙色(Hue7.5YR6/6)	焼成良好 三角突帯
	40	甕	口縁部径(復元) 残存高	38.4 11.8	外面 口縁部:ナデ　胴部:ハケ後ナデ 内面 口縁部:ナデ　胴部:ハケ後ナデ		角閃石、白色粒子、石英、5mm以下の長石 外面:にぶい黄橙色(Hue10YR7/4) 内面:浅黄色(Hue10YR8/6)	
16	41	壺	口縁部径(復元) 器高 底径	34.7 64.2 7.0	外面 口縁部:横位ナデ　胴部:ハケ 内面 口縁部:横位ナデ　胴部:ハケ 頸部:横位ハケ、指頭圧痕、横位ナデ		角閃石、赤・白色粒子、石英、長石、雲母 外面:にぶい黄橙色(Hue10YR7/4) 内面:黄橙色(Hue10YR5/6)	突帯
	42	壺	口縁部径 残存高	43.2 20.4	外面 口縁部:横位ハケ後ナデ　胴部:ハケ後ナデ 内面 口縁部:斜位ハケ後ナデ　胴部:斜位ハケ		角閃石、白色粒子、石英、長石、雲母 外面:橙色(Hue5YR6/6) 内面:明赤褐色(Hue5YR5/6)	突帯
	43	甕	口縁部径(復元) 残存高	41.8 9.6	外面 口縁部:斜位ハケ　頸部:縦位ハケ 内面 横位ハケ、ナデ		角閃石、白・赤色粒子、金雲母 内外面:赤褐色(Hue5YR4/6)、橙色(Hue5YR6/6)	
	44	壺	口縁部径 残存高	29.8 16.8	外面 口縁部:ナデ　頸部:横位ハケ　胴部:横・斜位ハケ 内面 口縁部:ナデ　頸・胴部:横位ハケ後ナデ		角閃石、赤・白色粒子、石英、雲母 外面:橙色(Hue7.5YR6/6) 内面:橙色(Hue7.5YR6/6)	突帯
	45	壺	口縁部径 残存高	23.2 16.7	外面 口縁部:ナデ　頸部:タタキ後ナデ　胴部:斜位ハケ 内面 口縁部:ナデ　頸部:タタキ後ナデ・ミガキ 胴部:斜位ハケ		角閃石、赤・白色粒子 外面:橙色(Hue5YR6/6) 内面:明赤褐色(Hue5YR5/6)	突帯

第3表 伊古道跡 出土石包丁計測表

図	番号	石材	穿孔方法	刃部	備考	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
17	46	安山岩系石材	両側穿孔	片刃	刃部磨耗	4.6	7.35	0.6	27.4
	47	角閃石安山岩	両側穿孔	片刃	刃部に光沢有り	4.1	9.23	0.7	41.1

第3章　まとめ

第1節　総括

-十園遺跡-

十園遺跡は旧石器時代から中世までの複合遺跡である。旧石器時代のナイフ形石器から始まり、縄文時代早期、弥生時代中期後半から弥生時代後期後半、古代、中世に至るまで様々な遺構及び遺物の出土がみられる。十園遺跡の位置付けについては『十園遺跡』(辻田・竹中 2004)、『十園遺跡Ⅱ』(竹中・辻田 2005)に詳しく述べられているので、参照願いたい。ここでは、弥生時代中期後半から弥生時代後期後半にかけての十園遺跡の様相について述べたい。

遺跡内からは、弥生時代中期後半から弥生時代後期後半の集落跡が検出された。弥生時代中期後半の住居跡である4区SB01、SB02からは、丹塗りの広口壺や甕、高坏、須玖Ⅱ式系統の土器など北部九州から搬入されたと考えられる土器が多く出土した。また、住居跡の平面形状も在地の円形(32区SB01、SB02)とは異なり方形を呈す。どちらも溝などで区画されていないことから、同時期に共存していたと考えられる。在地の住居跡は弥生時代中期後半の時期はまだ平面形状は円形である。その後、弥生時代後期から次第に方形へと変化する。注目すべき点は、北部九州系の人々と在地の人々が共存していた可能性が高いということである。島原半島内のこれまでの調査では、北部九州系統の土器の出土例はあったものの、弥生時代中期の平面形状が方形の住居跡からまとまって出土することはなかった。十園遺跡の調査成果から、北部九州系の人々と在地の人々が共に暮らし、集落を形成した可能性があるといった大変貴重な成果が得られている。また、北部九州系の土器以外にも肥後系の脚台付甕や台付鉢などが出土していることから、肥後地域とも交流を行っていたと考えられる。

-伊古遺跡-

伊古遺跡は縄文時代草創期末から中世までの複合遺跡である。縄文時代草創期末の細石器から始まり、弥生時代中期後半から古墳時代初頭、中世に至るまで様々な遺構及び遺物の出土がみられる。伊古遺跡の位置付けについては、『伊古遺跡Ⅲ』(辻田他 2010)に詳しく述べられているので、参照願いたい。ここでは、弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけての伊古遺跡の様相について述べたい。

遺跡内からは、畿内系の壺に系譜を求められる長頸壺(第15図31)、北部九州系の丹塗りの広口壺(第14図22)など他地域から搬入されたと考えられる遺物が出土している。また、『伊古遺跡Ⅲ』(辻田他 2010)では、肥後系の免用式土器及び黒髪式の甕棺、北部九州系の須玖Ⅱ式の甕、南筑後地域の長胴甕が報告されており、いずれも搬入された土器である。また、脚台付甕や肥前型器台など在地の土器も出土している。発掘調査では水田跡は検出されていないが、石包丁が出土していることから、伊古遺跡の生産基盤は水稲耕作であったと考えられる。

【参考文献】

辻田直人・竹中哲朗　2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書(概報)第4集　長崎県国見町教育委員会

竹中哲朗・辻田直人　2005『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書(概報)第5集　長崎県国見町教育委員会

辻田直人他　2010『伊古遺跡Ⅲ』雲仙市文化財調査報告書　第8集　長崎県雲仙市教育委員会

村子晴奈　2016「伊古遺跡出土遺物について」『西海考古第9号』　西海考古同人会

第2節　脚台付甕について

脚台付甕とは、甕の底部に脚台が付いた土器で、弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけて有明海周辺の地域にみられる。島原半島の弥生時代後期の土器に早くから注目し、脚台付甕を含む弥生時代後期の土器集成を行ったのは、松藤(1975)である。松藤は口之津貝塚(南島原市)から出土した土器を「微量の中期上器を含みながらも全体として弥生後期後半から弥生終末期にかけての土器を主体としている」と結論付けている。その後、宮崎(1985・1986)によって西ノ角遺跡(諫早市)や今福遺跡(南島原市)から出土した土器の形式設定を行い、また時期ごとの形式変化を明らかにした。松藤、宮崎両氏の精力的な研究成果を踏まえて、島原半島の弥生時代中期後半から弥生時代後期後半の遺跡から出土した脚台付甕について、また脚台付甕の分布範囲について微力であるが述べたい。

島原半島では、今回報告した十園遺跡(雲仙市)、伊古遺跡(雲仙市)の他に、仲遺跡(雲仙市)、龍王遺跡(雲仙市)、陣ノ内遺跡(雲仙市)、一野遺跡(島原市)、今福遺跡(南島原市)から脚台付甕が出土している。島原半島でも主に有明海側に立地する遺跡から出土するという特徴を持つ。遺物包含層や住居跡、環濠、墓域に伴って出土する例が多く、墓域から出土する脚台付甕は、肥後地域の特徴を持つものが多い。伊古遺跡(2010)や佃遺跡(2013)の墓域からは、甕棺に脚台付甕を用いており、その特徴から肥後地域から搬入されたもの(黒髪式土器)と考えられる。しかし、墓域以外の住居跡や環濠及び遺物包含層から出土した脚台付甕は、肥後地域から搬入されたものではなく、その形状は肥後系の脚台付甕とはやや異なる印象を受けることから、肥後系の黒髪式土器の影響を受け、在地でつくられた可能性が高い。また、土器の表面には炭化物が付着している割合が多いことから、日常的に煮炊きする器として使用されていたと考えられる。

脚台付甕は、有明海周辺地域から出土している。福岡平野を中心とする北部九州では脚台付甕ではなく、底部が平底の甕が主流である。佐賀県中部を流れる六角川周辺地域を境とし、肥後地域や島原半島では脚台付の甕が用いられる。底部の形状が異なる原因の一つとして、炉との関係性が考えられるが、その関係性について言及している事例は少ない。今後の研究課題としたい。

最後に、本報告書を作成するにあたってトレースや写真、図版などの編集作業に協力いただいた報告書作成スタッフに末筆ながら、感謝いたします。

【参考文献】

浦田和彦　1992『一野遺跡』有明町文化財調査報告書第11集　有明町教育委員会
正林護・永嶋豊　1998『陣ノ内遺跡』瑞穂町文化財調査報告書第3集　長崎県瑞穂町教育委員会
辻田直人・村子晴奈　2013『佃遺跡Ⅱ』雲仙市文化財調査報告書第12集　長崎県雲仙市教育委員会
松藤和人　1975『口ノ津焼火遺跡調査報告』百人委員会埋蔵文化財報告第5集　百人委員会
宮崎貴夫　1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第73集　長崎県教育委員会
宮崎貴夫　1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集　長崎県教育委員会
宮崎貴夫　2016「台付甕と透かしを持つ器台の成立と消滅」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』
長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会　長崎県考古学会

図　版

十圃遺跡上空写真（昭和36年 国土地理院）

図版 2

4 区 SB01・02 上空写真(検出状況)

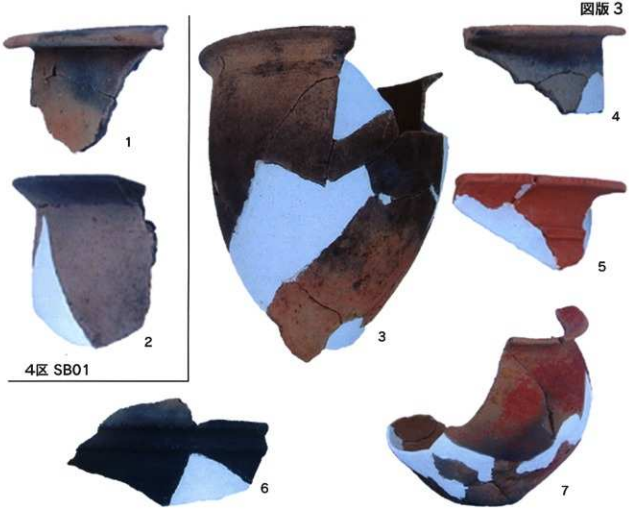
4 区 SB01 上空写真

3 区・5 区 SD01 上空写真

4 区 SB01・02 上空写真

3 区・5 区 SD01 上空写真(完掘状況)

26 区 SD01・02 上空写真(完掘状況)

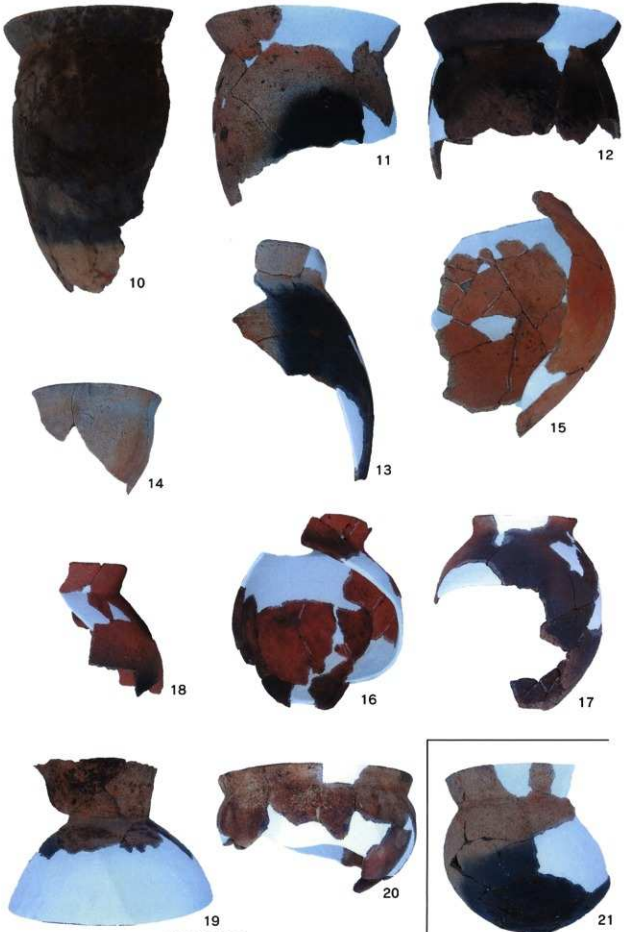


3区 SD01・5区 SD02

26区 SD02

十圓遺跡出土土器

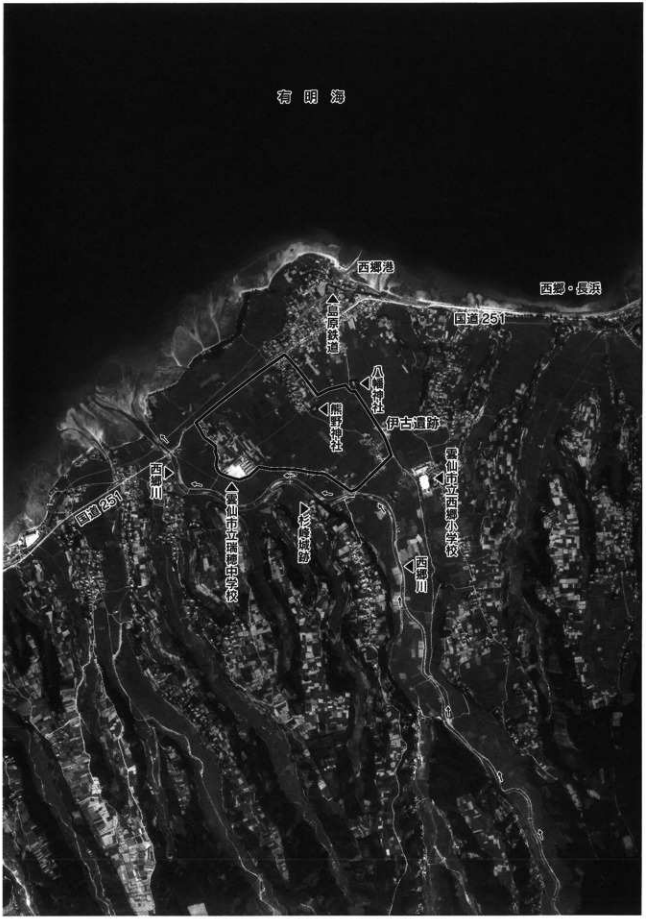
図版 4



26 区 SD02

12 区 SD03

十圓遺跡出土土器



伊古遺跡上空写真(昭和35年 国土地理院)

図版 6

23

24

25

27

28

29

31

32

33

D6 区 調査区外東側

伊古遺跡出土土器

34

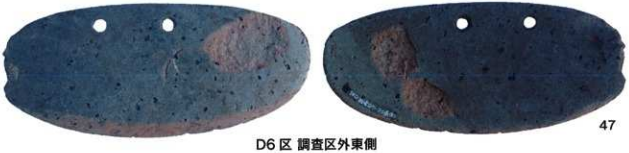
35

36

43

45

46


47

D6 区 調査区外東側

伊古遺跡出土土器・石器

報告書抄録

ふりがな	じゅうぞのいせき　すりー　・　いこいせき　ふぉー
書名	十園遺跡Ⅲ・伊古遺跡Ⅳ
副書名	
巻次	
シリーズ名	雲仙市文化財調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	辻田　直人・村子　晴奈
編集機関	雲仙市教育委員会
所在地	〒　854－0492　長崎県雲仙市千々石町戊582番地　Tel 0957-37-3113　Fax 0957-37-3112
発行年月日	西暦：　2017年3月24日　和暦：　平成29年3月24日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
十園遺跡（じゅうぞのいせき）	長崎県雲仙市（ながさきけんうんぜんし） 国見町（くにみちょう） 多比良（たいら）	42213	86-22	32 ° 51 ′ 28 ″	130 ° 18 ′ 9 ″	2000/8/25 ～ 2004/6/17	6,000㎡	圃場整備
伊古遺跡（いこいせき）	長崎県雲仙市（ながさきけんうんぜんし） 瑞穂町（みずほちょう） 西郷伊古名（さいごういこみょう）	42362	85-60	32 ° 51 ′ 57 ″	130 ° 14 ′ 40 ″	2005/8/17 ～ 2008/10/10	9,900㎡	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
十園遺跡	遺物包含地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 奈良・平安時代	Pit おとし穴状遺構 竪穴住居跡・環濠 大型掘立柱建物群 水路・溝・河川	剥片尖頭器 台形石器・梅ノ原式土器 弥生土器・石器・鉄器 土師器・須恵器 石帯	旧石器文化層 環濠集落
伊古遺跡	遺物包含地	縄文時代草創期 弥生時代 古墳時代 中世	石器集中地点 甕棺墓 木製品水漬遺構 掘立柱建物跡	細石刃・細石核・尖頭器 石斧・スクレイパー 甕棺・須玖式土器 古式土師器 青磁・白磁・石鍋 瓦器碗・土師皿	細石刃作製遺跡 河川堆積

Abstract

Book title	Juuzono Site Ⅲ・Iko Site Ⅳ
Subtitle	
Volume name	The Report on an Investigation of Cultural Properties in Unzen City
Volume	Vol. 16
Editors	Naoto Tsujita・Haruna Murako
Editorial organization	A Board of Education in Unzen City, Nagasaki Prefecture, Japan
Address	Bo 582, Chijiwa-cho, Unzen City, Nagasaki Prefecture, 854-0492, Japan Tel 0957-37-3113 Fax0957-37-3112
Date of issue	2017/3/24

Site name	Location	City code	Site number	North latitude ° ′ ″	East longitude ° ′ ″	Investigated term	Investigated area (㎡)	Investigatied cause
Juuzono Site	Taira, Kunimi-cho, Unzen City, Nagasaki Prefecture, Japan	42213	86-22	32 ° 51 ′ 28 ″	130 ° 18 ′ 9 ″	2000/8/25 ~ 2004/6/17	6,000㎡	comprehensive improvement of the plowed field
Iko Site	Saigoikonyo, Mizuho-cho, Unzen City, Nagasaki Prefecture, Japan	42362	85-60	32 ° 51 ′ 57 ″	130 ° 14 ′ 40 ″	2005/8/17 ~ 2008/10/10	9,900㎡	comprehensive improvement of the plowed field

Site kind	Period	Main features	Main artifacts	Special mention
remains	the Paleolithic period	Pit	Stemmed point on blade	Paleolithic cultural layer
	the Jomon period	Pitfall	Trapeze, Kakoinohara-type of earthenware	
	the Yayoi period	Pit dwelling, Moat	Yayoi ware, Stone tool, Iron tool	Moated village
	the Nara and Heian period	Big timber buildings	Haji earthenware, Stoneware	
		Waterway, Ditch, Old river	Stone ornament of a status symbol	
remains	the Incipient Jomon period	Stone artifacts concentration	Microblade, Microblade core, Point Stone ax, Scraper	Place where microblade were made
	the Yayoi period	Inhumation in a burial jar	Burial jar, Sugu-type of earthenware	Old river sediments
	the Kofun period	Feature which soaks wood products	Earlier type of Haji earthenware	
	the Middle Ages	Timber building	Chinese celadon, Chinese white porcelain, Pot made of talc Unglazed Haji plate, Unglazed bowl blackened by smoke	

雲仙市文化財調査報告書　第16集

juuzono　　i　ko
十園遺跡Ⅲ・伊古遺跡Ⅳ

2017

発行　雲仙市教育委員会
長崎県雲仙市千々石町戊582番地
TEL 0957-37-3113

印刷　合資会社やまさ印刷所
長崎県雲仙市国見町多比良乙210
TEL 0957-78-2002